令和元年11月1日発行

会報

No.33

新潟県精神医療機関協議会

事務局　新潟県精神保健福祉センター内
〒950-0994　新潟市中央区上所２丁目２-３
新潟ユニゾンプラザハート館
TEL 025(280)0111
FAX 025(280)0112
E-mail　ngt043040@pref.niigata.lg.jp

CONTENTS

巻頭言
第115回日本精神神経学会学術総会を振り返って…1

特集
第115回日本精神神経学会学術総会……2

お知らせ
令和元年度新潟県精神医療・保健・福祉関係者合同実践セミナー……8
精神保健福祉情報マップ……8

巻頭言

第115回日本精神神経学会学術総会を振り返って

新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野
教授　染　矢　俊　幸

2019年６月20-22日の３日間、朱鷺メッセにおいて、第115回日本精神神経学会学術総会を開催しました。２日前に起きた山形県沖を震源とする地震の影響で、開催を不安視する問い合わせが相次ぎ、実際1000人程度の方が参加を見送られたと思われますが、そうした中でも6000人を超える多くの皆様にご参加いただくことができました。

総会テーマ「－ときをこえてはばたけ－　人・こころ・脳をつなぐ精神医学」には、「こころの問題に適切に対応するためにはその現象をよく理解することが大切で、そのためには基盤にある「脳」機能の理解を深めなければならない」「たとえその道筋が困難でも、それを乗り越えていく必要がある」「一方で、還元的理解ではなく総体としての人間、一人ひとりの人を主役においてこころ・脳をつなぐ精神医学、その人の人生経験や価値観を理解する医学をめざしたい」、このような私の精神医学への思いと、本総会を通じて精神医学の未来を模索し、次のステージへの架け橋にしたいという願いを込めました。また副題の“とき”は、解き、時、朱鷺の３つの“とき”の意味で、心や脳の機能・病気を解き明かし、時を超えて、新潟の象徴でもある朱鷺のように未来へ羽ばたいていけ、というメッセージを込めました。

本総会では、運営の基本コンセプト「主体的にかかわる心」を軸に、精神医学の幅広い領域において諸問題に取り組む各専門家が主体性を持って参加できるような学会のあり方を模索しました。これまで一般演題数は300前後という状況が続いていましたが、全国の精神医学教室、関連学会や団体等に一般演題の充実を広く呼び掛け、また新たに一般演題の「特別ポスターコーナー」を設けて、参加者同士が情報交換できる場の実現を図りました。これらの取り組みによって約1300題にのぼる一般演題登録を達成することができたことは、新潟大会の特筆すべき成果ではないかと思います。

実際、朱鷺メッセはどの会場も多くの参加者で溢れ、これまでの学会には見られないほどの人数と熱気で満ちていました。特別ポスターコーナーでは、新潟自慢の塩むすびを手にしながら和気あいあいとディスカッションする光景がみられ、当初の目論み通り「経験を語り合う」場が実現し、これこそが学会のあるべき姿なのだと再認識しました。参加された先生方からは「ポスターセッションの充実ぶりはまるで国際学会」「学会の新しい姿を作り上げたエポックメイキングな大会」など多くの高い評価をいただきました。われわれが目指した「会員が主体的にかかわる学会」が多少なりとも実現できたのではないかと感じています。

また今回、新潟日報に載せた学会特集号も大変好評で、新潟の精神医学の歩みや成果を参加者の皆さんに広く伝えることができたのではないかと思います。

新潟での開催が３回目となった第115回学術総会。元号が改まったこの年に「精神神経学会新時代の幕開け」「令和の新潟革命」といったこの上ない評価をいただき、会長冥利に尽きる思いです。お力添えをいただきました新潟県精神医療機関協議会の皆様にあらためて心より御礼を申し上げます。

特　集
第115回日本精神神経学会学術総会について

学術総会概要

会　　長：染矢　俊幸（新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野 教授）
副　会　長：松田ひろし（特定医療法人財団立川メディカルセンター柏崎厚生病院 院長）
会　　期：令和元年６月20日（木）～６月22日（土）
会　　場：朱鷺メッセ

総会テーマ

「－ときをこえてはばたけ－ 人・こころ・脳をつなぐ精神医学」

新潟県では63年ぶり、３回目の開催となった日本精神神経学会学術総会について、県内外から参加された方々からメッセージをお寄せいただきました。

総会プログラム集

会長講演

第115回日本精神神経学会学術総会に参加して

新潟県精神保健福祉センター所長　堀　井　淳　一

まずは、新潟県で第115回日本精神神経学会学術総会が無事、盛大に開催されましたことをお喜び申し上げますとともに、会長を務められた染矢先生をはじめ、開催準備、運営に当たられた全ての皆様のご尽力に敬意を表したいと思います。

また、直前に大きな地震があったにも関わらず、多くの方々から参加いただいたことに地元精神保健福祉センター所長として感謝申し上げます。

大会冒頭での染矢先生の新潟、そして新潟大学医学部の歴史についての講演は、新潟で育った私としても大変興味深かったです。初めて知ったことも多く、やはり街の歴史を知るということは大切であると改めて認識しました。

私はこれまで、県庁と保健所で勤務してきましたが、今年の４月から初めて県精神保健福祉センターの所長を務めております。精神科ではないため、精神神経学会には初めて参加させていただきました。初日と３日目午後のみの参加であったため、十分に会場を回ることができなかったのですが、精神保健福祉センターの業務についてはもちろんですが、これまでの仕事と関連して興味のあったシンポジウム、発表を中心に聞いてきました。

初日午後の産業医関連のシンポジウムでは、産業医として、また職場の管理者として、実際にうつ病から職場復帰をする事例を抱えることが多く、関心があったのですが、やはりクリニック等の主治医の先生方との情報共有、連携について難しさを感じました。

最終日午後には、昨年度まで県庁健康対策課で関わってきた「旧優生保護法と精神科医療を検証する」シンポジウムを拝聴しました。歴史的、体系的な報告が多く、もう少し具体的な内容（審査会との関わり等）についても聞けたらよかったと思いました。また、時間が合わず、自分の最も興味のある分野の災害対応のシンポジウムや発表を聞くことがほとんどできなかったのが残念ではありました。

その中で、本当に偶然ではありましたが、個人的にうれしい出来事もありました。10年程前に県庁の勤務医等確保対策室に勤務していた当時、県費修学生として関わった先生と会場でばったり会うことができました。私の異動等いろいろあって、臨床研修終了後は全く接点がなかったので、神奈川県で元気に働いていることを聞いて安心しましたし、本当にうれしい再会でした。

学術総会全体を通してですが、ロビーを含めた会場全体から活気、熱気を感じることができました。全国から集まった多くの方々にも新潟らしさを所々に感じてもらえたと思いますし、まさに学術総会のテーマである「－ときをこえてはばたけ－人、こころ、脳をつなぐ精神医学」を体感できる会になったのではないかと思います。このエネルギーを日々の活動に注いで、がんばっていきたいと思います。

第115回日本精神神経学会学術総会の報告

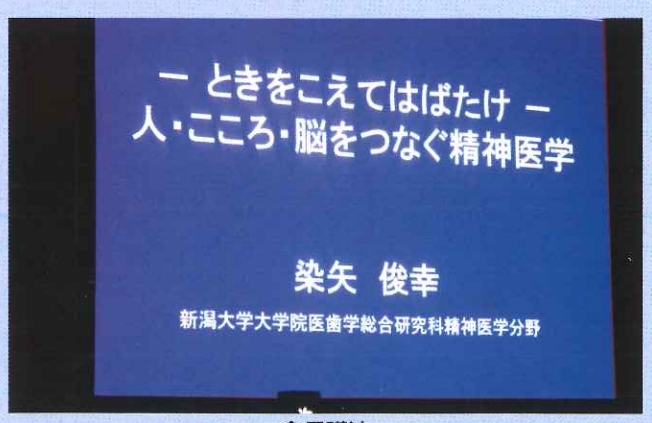
新潟大学医学部総合医学教育センター　准教授　須　貝　拓　朗

新潟大学医学部精神医学教室の主催により、2019年６月20日から３日間、第115回日本精神神経学会学術総会（会長：染矢俊幸、副会長：松田ひろし）を開催いたしました。

開催２日前に発生したマグニチュード6.7を記録した山形県沖地震の影響もあり、参加を見送られた先生も数多くいらっしゃった中で、6000人を超える方々にご参加いただきましたこと、学会及び運営事務局を代表して改めて厚く御礼申し上げます。

学会事務局発足当初、我々はまず学会の「顔」ともなる総会のテーマ作りに教室一丸となって多大な時間を割きました。「－ときをこえてはばたけ－ 人・こころ・脳をつなぐ精神医学」、そこには染矢大会長の並々ならぬ思いが込められており、これ以上ない革新的で奥深いテーマを掲げることができたと大変満足しております。

このテーマのもと、今総会の準備に当たり我々が強く意識したことは「精神科基幹学会としてのあり方」についてです。染矢大会長は常日頃より「精神神経領域の専門性の多様さから、親学会であるこの総会に自らの知見を持ち寄り、一般演題として発表するという土壌・文化が十分に形成されていない」ことを問題視されており、我々事務局もまずは一般演題を充実させることがこの現状を打開する大きな足掛かりになるのではと考えました。最終的には、約1300題という本学会としては例を見ない数の一般演題登録を達成することができました。



会長講演

会長講演会場

大会初日に行われた会長講演は、染矢大会長の新潟大学が誕生した歴史をまず紹介したうえで日本に近代医学が導入された頃の精神医学を取り巻く世界の動向が概説し、精神科診断学が20世紀半ばに直面した課題とそれに対して生まれた新しい動き、その後生じた「診断基準が規定するものが疾患である」という誤解、それに対応するための提言など、今後の精神医学の課題を詳しく展望いただきました。

さらに、診断学の整備を受けた精神疾患の病因・病態研究や治療学研究の成果、特に患者の身体的側面という視点に着目した新たな研究領域の展開、新潟中越地震対策等の災害精神医学、精神科医療構造の将来予測に及ぶ実に幅広い内容が提示され、かつそれらが見事に統合された講演でした。神庭学会理事長をはじめ、多くの聴衆から賞賛の声が寄せられました。

会長企画シンポジウム１「科学的根拠に基づいた精神保健医療政策立案：病床推計から見たこれからの方向性」では、斬新な着眼点と解析手法で日本の精神科医療の将来が的確に予測された経緯について、会長企画２「統合失調症患者の生命と健康を守るための新たなる視点」では、精神疾患患者が直面する死亡リスクやその身体的背景を総括し、各身体リスクの予防や多職種で取り組むことの重要性など、これまで取り上げられることの

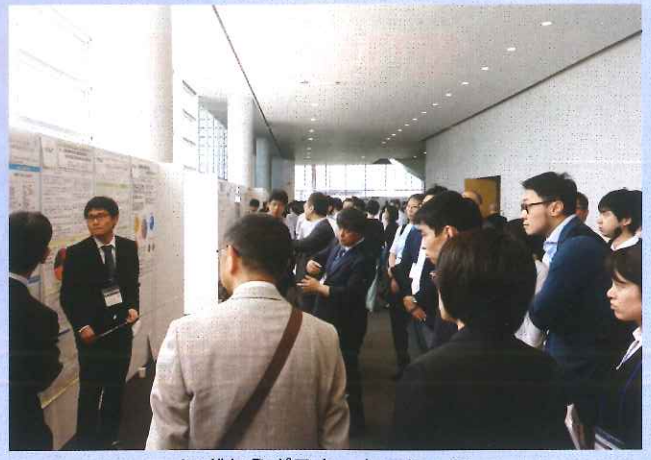
（次頁へつづく）

少なかった新たな研究分野の展開について紹介いただき、それぞれ会場からたくさんの質問や意見が飛び交い、精神科医療をより良いものにしたいという参加者の熱意が感じられる大変活発なシンポジウムとなりました。一般演題やそのほかの特別講演も含め、いずれのプログラムも会場に足を運んだ来場者の人数と熱気はこれまでの学会には見られなかったものであり、参加された先生方にも「国際学会なみ」「会場にすごい人数」「精神神経学会新時代の幕開け」など非常にたくさんのうれしい評価を直接いただくことができました。さらに大会中に行われたアンケートでもプログラム内容に関する多くの賞賛を賜りました。我々主催事務局としましてはまさに感無量でした。

新潟の街を楽しんでいただきたく、おもてなし満載で催された懇親会は信濃川をのぞむ萬代橋の袂、新潟グランドホテルで行われ、300名を超える先生方にご参加いただきました。新潟自慢の米やお酒はもちろんのこと、アトラクションとして古町芸妓の舞も堪能いただくなど大変盛況でした。

最終日に開催した市民公開講座『うちの家族は大丈夫？やめたい・・でもやめられない　依存を理解する』でも予想をはるかに超える約300人の一般市民の方々にご参加いただきました。素朴な疑問から我々も深く考えさせられる内容まで多くの質問が飛び交うなど、社会的関心の高さを直に感じることができ、大変有意義な市民公開講座でした。

にぎあうポスターセッション



にぎあうポスターセッション

今回の新潟大会は、染矢大会長と松田副大会長のもと、まさしく「会員が主体的に関わる」学会を実現できたのではないかと考えております。

最後になりますが、日本精神神経学会が今後ますます発展していくことを祈念いたしまして、第115回日本精神神経学会学術総会の報告とさせていただきます。

会場　朱鷺メッセ

第115回日本精神神経学会学術総会に出席して

千曲荘病院　院長　遠　藤　謙　二

中部地区から代議員に選出されていることもあり、ここ数年は総会前日の代議員会から４日間フルで学会に参加することが多くなった。代議員会では、理事の改選が主題であった。前々回，前回は各種団体からの選挙活動が活発であったが、今年は比較的静かで、女性理事の推薦活動があったことに時代の流れを感じた。結局、理事選挙は立候補者が定数通りで無投票となった。

染矢俊幸大会長が１年ほど前から宣言していた通り、一般演題が多数出されたのが今学会の大きな特徴となっていた。ポスター発表および17会場演題が並行して進む中で、私が聴いた限られた発表の感想、報告になることをお許し願いたい。

初日は会長講演の拝聴から始まった。「人・こころ・脳をつなぐ精神医学」という学会テーマを解説された。会長講演にふさわしく、格調高い内容であり、疾患と診断基準の関係についての説明は大変分かりやすく、DSM等の操作診断に対する誤解を払拭するものになったと感じられた。

午後は地域精神医療の一般演題の座長をさせて頂いた。昭和初期、戦前の精神科病院の状況、私宅監置等についての発表（埼玉病院　金川英雄先生他）は日頃聴くことがない、貴重な内容で、個人的には大変勉強になった。精神医療は時代、環境に大きく影響されるものと改めて実感させられた。

２日の午後は、委員会シンポジウム「精神科医療における身体拘束の現状と課題」を聴講した。私の病院でも身体拘束解除後に肺梗塞を発症し不幸な転帰を辿った事例を経験しており、切実な関心事であった。国立精神神経医療研究センターの山之内芳雄先生は法的側面を中心に問題点を分かりやすく整理してくれた。つぐみ法律事務所の東奈央先生は法律家の立場から「監視すべき対象とする」「対象者からSOSのルートを確保する」等臨床家にとって厳しい意見を述べられた。山梨県立北病院の三澤史斉先生は元々抑制帯が無かった等歴史的に拘束の少ない病院の立場から強制的治療を行う際の倫理的手続きなどを解説された。

倫理的にも、身体合併症のリスクを減らすためにも、身体拘束を最小化すべく全医療機関が取り組むべき課題と痛感した。

ただ、３日目に行われたシンポ「医療倫理と安全の葛藤」で論じられたが、転倒事故などを防ぐための身体拘束をどこまで許容できるのかは悩ましい問題である。

３日目の午前は委員会シンポジウム「教育を通じて伝えたいこと・伝えるべきこと―学校保健教育への発信―」を興味深く聴いた。1970年代後半から、義務教育および高校の教科書から外されていた「精神疾患」が2012年より順次復活する。多くの精神科関係者が望む精神科への偏見の軽減が進むことを期待したい。国で学習指導要領の作成に関わった横嶋剛先生から教育現場の実情を聞く機会になり大変参考になった。今後授業を通じて青少年が精神疾患に対してどんな印象をもつのか、私たち自身専門家として各地域で注視していきたい。

３日目の午後は、委員会シンポジウム「旧優生保護法と精神科医療を検証する」に出席した。中でも印象に残ったのは、精神医療は時代を色濃く反映する分野であることの再確認ともいえるものであった。青柿舎の岡田靖雄先生の言葉「1957年東京大学精神科に入院していた女性患者の回復ぶりをみて、内村祐之教授は“岡田君、Schizophrenieってよくなることがあるんだね”と目をみはっていった」は強く記憶に残った。当時の教科書に載っている精神疾患は「治らない」「遺伝する」等現在偏見と言っていることが専門家の間の常識だった。また当時の優生保護法では、強制不妊手術について行政指導がなされ、これを履行しない精神科医は法令違反という時代であったことを知り、二度びっくりした。

この４日間は、大いに学んだだけでなく、新潟大学時代の旧友、先輩と会食でき楽しい思い出となった。今回のシンポジウムに「金沢総会50年―その後―」があったが、昭和44年の金沢学会以降、多くの会員がしり込みして、シュリンクしていた学会が、少なくとも平成年代以降は、より健全化し多くの会員が参加し、幅広い分野での研究発表がなされ、真摯な議論が安心して出来ていると感じている。最後に素晴らしい学会を企画運営された染矢俊幸教授はじめ、新潟大学医局員および同窓会の皆様に感謝申し上げ、筆を置きたい。

私自身の意識改革―第115回日本精神神経学会学術総会で感じたこと

医療法人水明会 佐潟荘　院長　北　村　秀　明

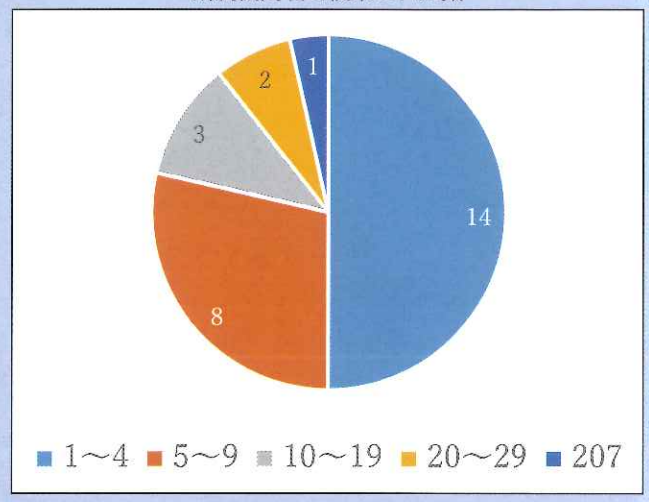
新潟では63年ぶり３回目となる日本精神神経学会学術総会―ときをこえてはばたけ―人・こころ・脳をつなぐ精神医学は、新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野 染矢俊幸 教授を会長に盛会のうちに終わりました。令和元年11月に発刊予定の雑誌『精神科臨床 Legato』（メディカルレビュー社）にも書かせていただきましたが、「精神神経学会新時代の幕開け」「令和の新潟革命」といった先生方からのご評価は、けっして大げさなものではないでしょう。新潟の精神医療機関より寄付された銘酒が飲み放題、まさに今回の学術総会の革新性が、こんな所にも発揮されていました。企画、運営に尽力された染矢教授、および関係の先生方に、あらためて感謝申し上げたいと思います。

さて、私が今回の学術総会で最も驚いたこと、すなわち1,300題に迫る、しかしこれまでは300題前後であった本学会の一般演題発表を題材に、自省を込めて若干の意見を述べさせていただきたいと思います。まず「所属機関名で検索された数」と題する次の円グラフをご覧ください。

今回の学術総会のプログラムファイル（PDF）上で、新潟県内の主な精神科病院、総合病院精神科、精神科クリニックの名前を検索して、ヒット数をグラフ化しました。５区分はもちろん恣意的で、207とあるのは新潟大学医歯学総合病院です。今回の学術総会に、新潟県内28の精神医療機関（行政機関については未検索）から貢献があったことになります。もちろん検索数ゼロが結構あります。ちなみに、私の病院「佐潟荘」の検索数は８、３人の先生で５つのポスターを発表、私が市民公開講座の司会をして検査数８です。結構がんばったつもりでしたが、大して目立ってないなと少しがっかりしました。

ちなみに、佐潟荘より多かった精神科病院は三島病院９、末広橋病院18、柏崎厚生病院28、県立精神医療センターは23でした。これら結果の理由については、皆さん容易に想像がつくのではないでしょうか。他の総合病院精神科の検索数は８から11、４つ検索されたクリニックもありました。

所属機関名で検索された数



精神科病院は最新の精神医学に基づいて、最良の精神医療を提供する専門病院であるべきです。新潟の先生方はみな臨床に熱心で、私も勤務する病院の管理者として本当に頼もしい限りです。ただし、理想を言えばベースとなる最新の精神医学を担保するために、自身の経験を大切にしつつもそれを支える知識、技能をブラッシュアップする必要があり、ときには全国水準の多流試合が必要でしょう。製薬会社からみの講演会にとどまらず、地方会、そして今回のような全国大会に今後も出向き、できるだけ広範囲の精神医学の同僚たち（colleagues）と学術交流をもつ必要があると、私自身強く意識しました。その意識改革をさせてくれたのが、今回の新潟大会であったと思います。

第115回日本精神神経学会学術総会に参加して

新潟県精神保健福祉センター所長　堀　井　淳　一

まずは、新潟県で第115回日本精神神経学会学術総会が無事、盛大に開催されましたことをお喜び申し上げますとともに、会長を務められた染矢先生をはじめ、開催準備、運営に当たられた全ての皆様のご尽力に敬意を表したいと思います。

また、直前に大きな地震があったにも関わらず、多くの方々から参加いただいたことに地元精神保健福祉センター所長として感謝申し上げます。

大会冒頭での染矢先生の新潟、そして新潟大学医学部の歴史についての講演は、新潟で育った私としても大変興味深かったです。初めて知ったことも多く、やはり街の歴史を知るということは大切であると改めて認識しました。

私はこれまで、県庁と保健所で勤務してきましたが、今年の４月から初めて県精神保健福祉センターの所長を務めております。精神科ではないため、精神神経学会には初めて参加させていただきました。初日と３日目午後のみの参加であったため、十分に会場を回ることができなかったのですが、精神保健福祉センターの業務についてはもちろんですが、これまでの仕事と関連して興味のあったシンポジウム、発表を中心に聞いてきました。

初日午後の産業医関連のシンポジウムでは、産業医として、また職場の管理者として、実際にうつ病から職場復帰をする事例を抱えることが多く、関心があったのですが、やはりクリニック等の主治医の先生方との情報共有、連携について難しさを感じました。

最終日午後には、昨年度まで県庁健康対策課で関わってきた「旧優生保護法と精神科医療を検証する」シンポジウムを拝聴しました。歴史的、体系的な報告が多く、もう少し具体的な内容（審査会との関わり等）についても聞けたらよかったと思いました。また、時間が合わず、自分の最も興味のある分野の災害対応のシンポジウムや発表を聞くことがほとんどできなかったのが残念ではありました。

その中で、本当に偶然ではありましたが、個人的にうれしい出来事もありました。10年程前に県庁の勤務医等確保対策室に勤務していた当時、県費修学生として関わった先生と会場でばったり会うことができました。私の異動等いろいろあって、臨床研修終了後は全く接点がなかったので、神奈川県で元気に働いていることを聞いて安心しましたし、本当にうれしい再会でした。

学術総会全体を通してですが、ロビーを含めた会場全体から活気、熱気を感じることができました。全国から集まった多くの方々にも新潟らしさを所々に感じてもらえたと思いますし、まさに学術総会のテーマである「－ときをこえてはばたけ－人、こころ、脳をつなぐ精神医学」を体感できる会になったのではないかと思います。このエネルギーを日々の活動に注いで、がんばっていきたいと思います。

令和元年度 新潟県精神医療・保健・福祉関係者合同実践セミナーのご案内

1　日　時　令和２年２月21日（金）午前10時30分～午後４時

2　会　場　新潟県民会館　小ホール（住所：新潟市中央区一番堀通町3-13）

3　テーマ　**「依存症の予防と正しい理解～回復のための支援について～」**

アルコール、薬物、ギャンブル等の依存症は適切な治療と支援により、回復が十分に可能な疾患である一方で、依存症に関する正しい知識と理解が進んでいない上、依存症の治療や支援を行う機関が少ないことや依存症への偏見や差別もあり、依存症本人やその家族が適切な治療や支援に結びついていないという課題がある。

依存症についての正しい理解とともに、予防教育、治療から回復まで、精神医療・保健・福祉関係者がそれぞれ地域でできる支援や連携について考える契機とする。

4　主　催（関係４団体・１機関）

- 新潟県精神医療機関協議会
- 新潟県精神保健福祉士協会
- 新潟県精神保健福祉センター
- 新潟県精神障害者家族会連合会
- 新潟県精神障害者社会福祉施設協議会

5　プログラム（案）

【午前の部】〈基調講演〉

演　題　（仮）「依存症の予防と正しい理解について」

講　師　予防医療研究所代表　藤田医科大学客員教授　磯村　毅　氏

【午後の部】〈シンポジウム〉

◇シンポジスト（調整中）

◇座　長　県立精神医療センター　院長　細木　俊宏 先生

◇助言者　基調講演　講師　磯村　毅 氏

※内容の詳細及び申込み等については、後日開催通知を送付いたします。

お知らせ 精神保健福祉情報マップについて

精神保健福祉センターでは、精神保健福祉業務に従事する支援者向けに、毎年**「精神保健福祉情報マップ」**を作成しています。

県内の精神科医療機関・障害福祉サービス事業所等の関係機関・団体、相談機関等について掲載しており、令和元年度版を作成いたしました。

すでに関係機関には送付させていただいておりますが、まだ多少残部がございますので、ご希望される場合は、精神保健福祉センターまでお問合せください。

〈問い合わせ先〉新潟県精神保健福祉センター
電話：025-280-0111